

『虞美人草』なぶる

Junko Higasa 2013.11.13

藤尾は男になぶられる。なぶるとは「𪔐る」と書く。見ての通り女が男に挟まれている。意味は「手で弄ぶ」「他人を苦しめて面白がる」「軽く見てバカにする」などで、丁度猫が鼠を弄ぶような様である。

亡き父は藤尾の夫を宗近君に決めていた。腹違いで厭世的な兄は現実的な藤尾を何かと苦しめる。金持ちで単純な宗近君には軽く見られ、貧しくて賢い小野さんには女心を弄ばれる。藤尾はいったい自分の意思をどこで表明できるのだろうか。年齢や立場、地位財産、能力に関係なく、男社会は「自分たちが男で、藤尾が女である」というだけで、藤尾を人形扱いする。社会体制は男に頼らなければ生きていけない時勢である。彼女の精神は時代の拘束状態だ。

そこで藤尾は反乱する。藤尾は「女だって人間だ」と豪語する。すると「𪔐る」という字は「男に挟まれた女」ではなく「男を天秤にかける女」になる。

「天秤にかける」とは「二者択一を迫られたときに優劣・損得を量る」ことである。藤尾は「父の遺言を代行する兄」と「自分の思う小野さん」を比べる。

「他人の意思」と「自分の意思」を秤に乗せる。「文明社会で役に立たない兄の無形知識」と「文明社会の色を成す小野さんの有形地位」を計量する。

さて、文字をよく見てみよう。女を𪔐るには男が二人必要だが、男を𪔐るには女は一人で充分だ。男は一見強そうに見えるが、実は弱い生き物である。